

琵琶橋

一

「驚いた驚いた」

「なにをそんなに驚いてるんだい」

「日蓮という坊さんは焼き殺されたと念仏や禅の人々が評判していたが、あれは嘘だったんだよ」

「そんなことがあるものか、松葉谷の夜討ち以来、日蓮さんの姿を、この鎌倉でみた者は一人もいないよ」

「どうしてどうしてわたしは今、琵琶橋のたもとでみてきたんだ」

「かたわにでもなつて、橋のたもとで、右や左の旦那様どうか一文お恵み下さい、よその御宗旨を悪くいった罪咎で、このあわれな姿でございます、とかなんとか、いつてるのかい、そいつは

みたいもんだね」

「とんでもない、御見当はずれさ、相も変らずだ、南無妙法蓮華經という旗をたてて、

念仏無間 禪天魔

真言亡国 律国賊

と前にも増してど鳴りたてておるよ」

「おやおや死ななかつたのかい。悪蓮の強い坊さんだねえ、だが念仏宗や禪宗の人々は困るだろう。自分たちが松葉谷の夜討ちをやつて日蓮さんを殺してしまつたと、あれ以来評判をたてて威張っていたんだから、殺してもお上からお咎めのない程悪い坊主だったんだといふらして鎌倉中を歩いていったんだ。そいつが生きていたんだとするとことは面倒だよ」

「こんどは日蓮坊も命はないぞ……」

「そうだねえ、しかし命は惜しくないとみえるなあ坊さんは、不思議な人さ、何処からあんな力が湧いてくるんだろう。俺にあの万分の一の力でもあつたならばお前なんかとこんなところで無駄口を聞いておる身分ではなかつたらうになあ」

「何をいやがる、俺にあの坊主の十分の一の力があつたら、大きな声ではいえねえが、この鎌倉、谷七郷を一寸掌の上に載せてるよ、近よるな、汚れる汚れる」

「大きく出やがったなあ、なにしろ日蓮さんもえらいところがあるよ、念仏無間、禪天魔、真言

亡国、律国賊、諸宗無得道、墮地獄之根源とくるんだからはげしいねえ、諸宗は型なしだよ。俺はこれから、琵琶橋へいって日蓮さんの説教を聞いてこよう、法論の理屈なんぞはどうでもいい、何処からあの力が出てくるのかさぐりあててやろう」

「日蓮は生きておったぞ。今この琵琶橋の橋の袂に立つ日蓮は、火にも焼けなかった不思議な日蓮であるぞ。昨年文応元年八月二十七日の夜、数百人の念仏宗や禅宗の人々が、ときの声をどつとあげて仏敵日蓮を亡せと日蓮が松葉谷の草庵に火を放つたのは、鎌倉中の人々のよう知る所だ。まことに日蓮が仏敵ならばその時に死んでおるであろう。ところがどうじゃ日蓮は今この鎌倉の琵琶橋の袂にたつて、南無妙法蓮華経の旗をたて、念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊と叫んでおるのだ。皆の衆の中には日蓮の草庵を焼討つたあの数百千の松明が八月二十七日の夜、名越の谷に向かつて走つたのをみた者もおるであろう。否この中にはその夜、日蓮の草庵にその松明を投げこんだ者も必ずおるであろう。だが、日蓮は死ななかつた。日蓮は焼けなかつた。数百人の念仏宗の人々、禅宗の者ども、真言宗の輩、律宗の族どもが、あのちっほけな草庵をとり囲んだのだ、蟻の這い出るすきもなくとり囲まれた中から日蓮は逃れた。これは如何なる秘術によるのであろうか不思議ではないか……。不思議とは思わないか、その秘術をここに説き明かそう。それは外でもない、日蓮が前に置いたその笈の上に安置した法華経一部八巻の中から出てお

るのだ。法華經の中には火も焼く能わず水も漂すことあたわずと書かれてあるが、日蓮が、法華經の經文を証明しただけだ。日蓮が力ではないぞ法華經の真文のしからしむるところであるのだ。法華經が日蓮を救ったればこそ日蓮は焼き殺されなかったのだ。では何故、貧道の身に生まれたこの日蓮を法華經は救ったのか、仏は日蓮を殺さなかったのか、これはこれ日蓮こそ今の世を救う仏様の使いなればこそだ。この鎌倉を否、この日本国中を救うべき仏様の声を伝える者なればこそ、仏は日蓮を生かしておいたのだ。今こそ日蓮が唱える四箇の格言、

念仏無間 禅天魔

真言亡国 律国賊

諸宗無得道 墮地獄之根源

とは仏様の声なることが証明されたのだ。何故ならば、この四箇の格言が嘘言ならば、諸宗の輩から火を放たれた日蓮が、なんでこの琵琶橋に立つてであろうか。文応元年八月二十七日の夜に死んでいなければならぬ筈だ。しかるに日蓮は死なない。皆の衆よ不思議とはかかる事柄に使う言葉だ……」

「国難きたる。国難きたる。一国を亡すような国難のきたる時は必ず前兆のあるものじゃ、突如として国難のきたるということは古今東西にない、経文によれば他国侵逼難といってよその国がこの日本国を攻めほろぼす難がくる。その前には必ず自界叛逆の難といって国の中に同志討ちが起る。自界叛逆が起れば必ず三年七年のちに他国侵逼難が来る前兆である。どうじゃ皆の衆、日蓮が天下国家のことのみ論じておると思つて上の空できいてはならぬぞ。自界叛逆というのは、お手前の家のことにたとえていえば、夫婦喧嘩のことじゃ。毎日毎日夫婦喧嘩しておれば、親戚の信用も落ちよう、隣り近所の信用も落ちる、あんなに夫婦喧嘩しておつたんでは、貸したのも返してはくれまいから、今日のうちにとつておこうと、借金とりが、わおつとおしかけて来る、これ即ち他国侵逼之難というのじゃ」

思いもかけぬ、たとえ話に、いつもは石をほうり古わらじを飛ばす聴衆が、わあつと笑つた時である。

「どけつどけつどけつ」
と声がかかった。

「真昼間、しかも鎌倉の街頭、執権様のお膝許近くにおいて御政道を云々するとは、身の程しらぬ坊主だ」

三、四十人もおったか聴衆はその声とともに、さつと道をひらいた。四、五人の間註所の役人が、その間をするすると蛇のように這り込んだが、矢庭に聖人をとりかこんだ。

「それ、天地は国の明鏡である。今この日本国に天変地夭がある。正に国主にとがあるべしと知るべきである。地神いかりをなして身をふるい、天神身より光を出してこの国をおどす。いかに諫むとも用いざれば、結局は人の身に入って自界叛逆をせしめ他国より責むべし……」

「だまれだまれ坊主つ、その口をふさぐべく召しとりに参ったぞ」

「して、いづれより参られたか」

聖人はとりかこんだ役人を見渡した。その恰好は象の前に鼠が四、五匹あつまつたような姿であった。役人はちよこまかと身体を動かしてとびつくような身がまえであるが、聖人は動ずる色もなく役人を見おろしておるのである。

「……いずこから来られたか」

聖人はにっこり笑って再び尋ねる。

「問註所から参った。執権さまの御命である。縛につかれない」

「この日蓮をしばるといふのか、ふうむ」

聖人は腹の底から感心したような声を出した。これまでなりゆきを黙ったままみておった聴衆の波はどつと動いた。わあっという声がかきこえた。拍手が鳴ったようでもあった。念仏の聲が大きくきこえ、その中に調子はずれの南無妙法蓮華經という声もまじつておつた。

矢庭に飛びかかろうとする役人に向かつて、聖人は、

「まあ待てっ」

といわれた。

「御房つ、みにくいぞ、この期に及んで待てとは」

役人は叱咤した。聖人はその役人に眼をむけると、やわらかにいった。

「これは、もののわかる御仁とみた。既に法華經に命をささげておるこの日蓮、待てと言つたのは捕縛をば待てというのではない、これじや、この袈裟のことだ……」

聖人御自分の袈裟をゆつくりと指されて一寸もちあげてみせた。

「この袈裟を着たまま捕縛したのではなにがなんでもその方どもの落度にもなるうかと思つて申したまでだ。また日蓮も袈裟をかけたまま縛につこうとも思わぬ、この袈裟をはずすまで暫くの間待たれい、後学のために袈裟のいわれを申しさかせようか」

聖人は役人を前にして、今縛につくとも思われぬ落着いたようすで、袈裟をばずしながら悠々と、袈裟のいわれを語るのであった。

「袈裟は別名を福田衣と称し、僧侶のこれを大切にすること武士の大小のごときものだ。大小を差したる武士に繩をかけぬがごとく、袈裟を着したる僧侶には繩はかけぬものじや。その方どもの落度にもなるうといったのはこの道理をいつたまでで、なおまた経文によれば「袈裟は即ち人天寶幢の相、尊重敬礼すれば梵天に生ず、袈裟を着る時宝塔の相を生ずれば、能く衆罪を滅して諸の福徳を生ずる」とある」

聖人は袈裟をはずすと右手にもつて、誰というあてもなく、ぐつと差しだした。

「南無妙法蓮華経 南無妙法蓮華経」

と群衆の中から、若い女が飛びだして聖人のけさを受けとった。驚かれた聖人は、

「これは御奇特、法華の衆か……」

「いいえ違います。ただ聖人のお姿が、けだかくて、思わず南無妙法蓮華経と口に出たまままでございます」

「それで結構、この袈裟をあずけますぞ」

聖人は女に袈裟を渡すと、

「さあさあお役人、日蓮只今より縛につきましよう」
はつきりした声でいわれた。